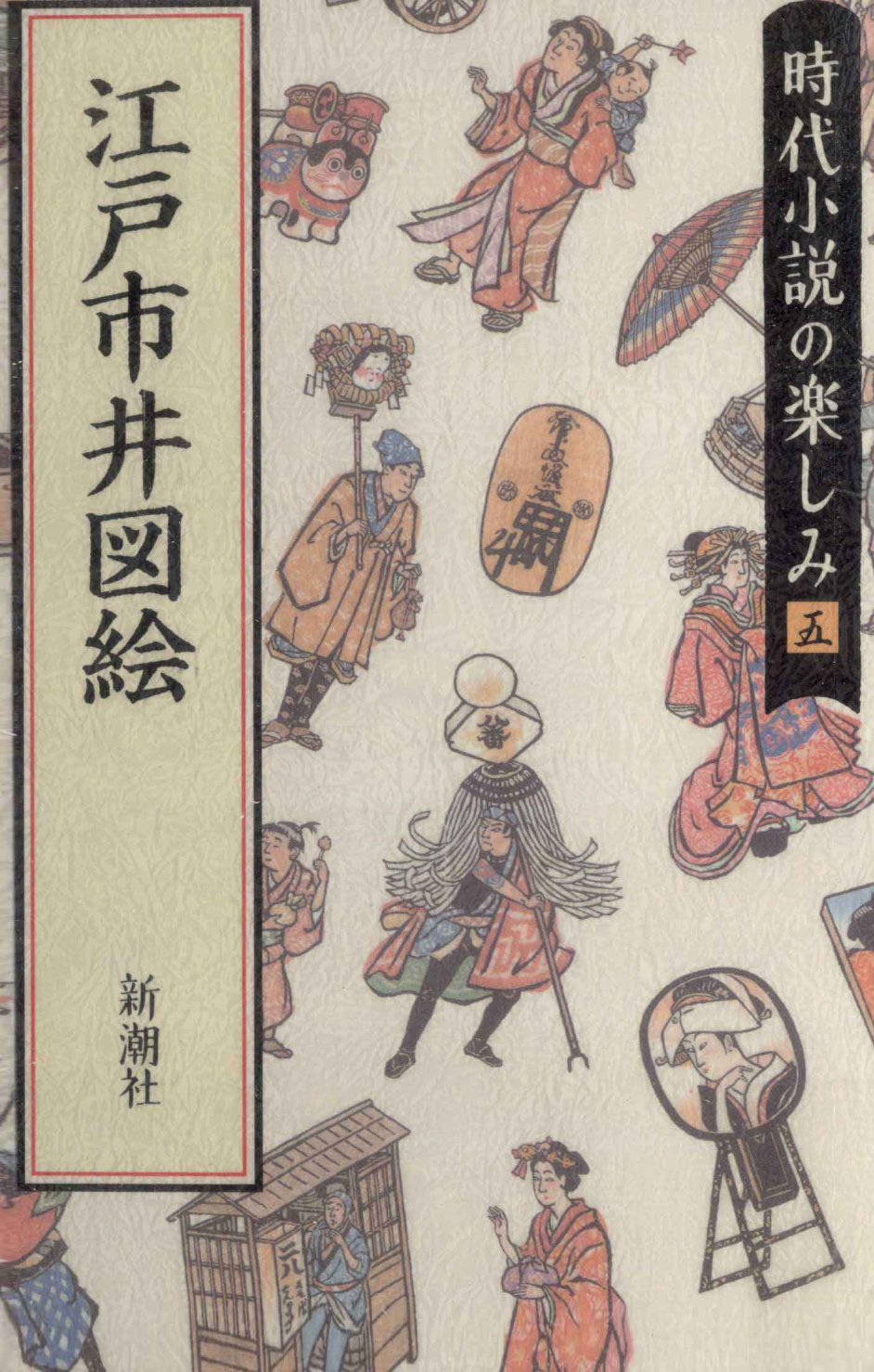


五

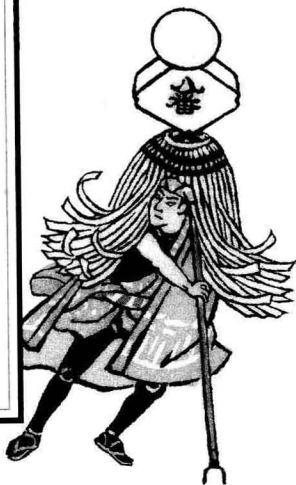
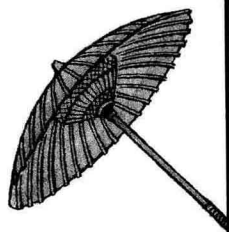
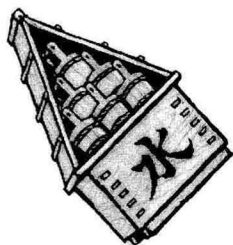
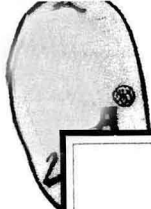
新潮社



時代小説の楽しみ 五

江戸市井図絵

新潮社



江戸市井図絵 えどしせいずえ
時代小説の楽しみ⑤ じだいしょうせつのたのしみ⑤



著者 山本周五郎他 やまもとしゅうごろう

発行 一九九〇年七月五日

二刷 一九九〇年八月二〇日

発行者 佐藤亮一

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一一一 編集〇三(266)五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社 製本所 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

© Kazuo Nawata & SHINCHOSHA 1990, Printed in Japan

ISBN4-10-602805-0 C0393

目

次

江戸っ子由来

柴田錬三郎

7

父と呼べ

藤沢周平

27

雨叩き善八

村上元三

63

浅草小町の嘲笑

笹沢左保

89

ちっちゃなかみさん

平岩弓枝

127

ぬけ参り

新田次郎

149

藤棚の下

伊藤桂一

167

冬の虹

澤田ふじ子

185

こんち午の日

山本周五郎

219

母子かづら

永井路子

259

火術師

五味康祐

283

たかが六里

北原亜以子

313

金太郎蕎麦

池波正太郎

337

代金百枚

小松重男

359

蜂

杉本苑子

405

寒の入り

早乙女貢

437

江戸前にて

富田常雄

455

おいらん俤

山手樹一郎

477

編者解説

縄田一男

508

柴田鍊三郎（しばた・れんざぶろう）

大正六（一九一七）年、岡山県邑久郡生れ。慶応大学支那文学科卒業。学生時代から小説を発表し、戦後、「書評」編集長から少年少女小説作家を経て、昭和二十六年『イエスの裔』で直木賞を受賞。三十一年からの「眠狂四郎」シリーズで一大ブームを作る。四十五年吉川英治文学賞受賞。五十三年没。『柴田鍊三郎時代小説全集』全二十六卷（昭和四十年、新潮社）、『柴田鍊三郎自選時代小説全集』全三十卷（昭和四十八年、集英社）、『柴田鍊三郎選集』全十八卷（平成元年、集英社）がある。

江戸っ子由来

柴田 錬三郎

装画・赤坂三好

江戸市井図絵

時代小説の楽しみ⑤

慶長八年、江戸城の大改築が成り、東南の海辺三十四町を埋め立てて新しい市街がつけられた時、徳川家康は、大久保彦左衛門を呼んで、

「屋敷をつかわそうと思うが、どのあたりが欲しいか、申せ」と、云った。

彦左衛門は、即座に、

「大名衆の屋敷を、一望のもとに見下せる台地が欲しいござる」と、こたえた。

「では、望みのままに、おのれでえらぶがよい」

家康は、微笑して、云った。

江戸は、つくられたばかりの城下町であつた。欲しい土地を自由にえらぶことができた。

江戸を家康にくれたのは、豊臣秀吉であつた。

天正十八年四月、日本全土の大軍をもつて小田原北条氏を囲んだ折、一日、秀吉は、家康をともなつて、石垣山の本営から、脚底の小田原城を見下し乍ら、

「北条が減んだならば、あの城に、お許が移られたら、どうじゃ？」と、すすめた。

家康は、つつましく、

「有難き幸せ——」

と、こたえた。

小田原城をくれる、ということは、関東八州を与える、という意味であつた。

「では、ひとつ、小便など、あびせてやろうかの」

秀吉は、前をまくつた。

「相伴つかまつる」

家康も、前をまくつた。

二条の液体は、小田原城にむかつて、勢いよく落下した。

放出し終えた時、家康は、何気ない口ぶりで、

「関東を賜つて、これを治めるには、この小田原は、ちと端寄りでは、ありますまいか」と、云つた。

「それも、そうなの」

「八州の中央ならば、この地より東に、およそ二十里へだてて、江戸城がござる。太田道灌が築いた城でござる。もう古びはてて居りますが、河を帯び丘を控えて、天然のまもりもよろしく、おゆるしあれば、改築いたして、すまいにいたしたく——」

秀吉は、その願いをゆるした。

並の頭脳の武将なら、天下に名をとどろかせた北条氏の居城を、大よろこびで、もらうところであつた。あるいは、小田原が不服なら、嘗て幕府の在った鎌倉を申出るところである。

家康は、あえて、江戸を所望した。

当時、江戸は、どう見ても、関東八州の太守の住むところとは、考えられなかった。

城といつても、かたはばかりで、構えはきわめて小規模で、濠もせまく、城壁すらもないと同様で

あつた。町屋といえは茅葺^{かやぶ}きの家が百ばかりならんでいるだけであつた。

東方は、ここもかしこも、汐入^{しほいり}りの芦原がつづき、侍屋敷町屋をものの十町と割りあてられそうもなかつた。西南は、渺々^{ひょうひょう}たる武蔵野の原野で、何処をしまりというべき様もなかつた。

いわば、八方があげひろげられている地であつた。

武將のすまいは、常に敵襲に備えて、地形がえらばれる。その常識からすれば、江戸は最も不適地であつた。

家康が、居城に江戸をえらんだときいて、麾下^{きか}の士らは、茫然^{ぼうぜん}としたことであつた。

家康は、別に、家臣たちに、なぜ江戸をえらんだか、その理由を説明しようとはしなかつた。

天正十八年八月朔日に、家康は、江戸城に入った。

まさしく、城といつても、ただの館にも劣るものであつた。さきの城主遠山右衛門が、永々の籠城^{ろうじょう}

のままに、うちすてておいたので、いたるところ破損していた。板葺きの屋根を、兵火からまもるた

めに土を塗っていたので、雨もりによつて、畳や敷きものは、ことごとく腐りはてていた。玄関の上

り壇には、舟板の幅の広さを二段に重ねて敷いてあるほどの、そまつさであつた。石垣などは、ひと

つも築かれてなく、みな芝土手であつた。

土手には、樹木や竹がしげつて、けものがちらちらとかすめていた。

城からすぐ海つづきになり、木戸門を出ると、漁師の小屋がならんでいた。遠山家のさむらいたち

は、氣がるに城を出て、肴^{さかな}を買いもとめていた模様である。

慶長見聞記によれば――。

「天正のおうち入りまでは、高き身分も卑^{いひ}しきも、みな、松の柱、竹の編戸、葎^{むくろ}の庵、蓬^{よもぎ}が宿、草葺の小家がちな軒のつまに、咲きかかりたる夕顔の白き花のみにて、蚊遣火のふすぶるも、哀れに見えて多かりし」

しかし、家康は、住むに堪えぬおんぼろ城に入つた時、うしろにしたがつてゐる本多佐渡守をふり

かえって、

「できあがつてしまつたものを貰うのは、誰にでもできる。何もないものを貰つて、自分でつくりあげるのは、誰にでもできるわざではない。そうではないか。佐渡——」
と云つて愉しげに笑つてみせた、という。

城の西北に、神田があつた。

神田というのは、むかし、各国に一箇所ずつ、大神宮の御供米を植える田が指定されていた——それをいう。

神田の背後に、高峻な山がそびえていた。神田山と、地下人たちは、称んでいた。

家康は、諸侯に命じて、千石に付一人の割で人夫を賦課して、この山を削らせて、城から東南のふかい入江を、埋めたたてたのであつた。（浜町、葭町、八丁堀、銀座、日比谷のあたりは、すなわち、神田山の土で作られたのである）

大久保彦左衛門は、仮宅である外桜田の松林の中の古寺へもどつて来た。

この地域は、大名小路になるべく、いま、屋敷造りで、昼夜、騒音をきわめていた。旗本たちは、西北に宅地をもらつて住んでいた。大番町といい、一番町から六番町にわかれていた。これは、賽の目に象り、陰陽四方に擬し、六番までの号数にして、一番町の裏を六番町にし、二番町の隣りに五番町を置き、三番四番を並べてあつた。

大久保彦左衛門は、しかし、番町に住むのをきらつて、いまだに、古刹の庫裡に、起居してゐるのであつた。

家臣は、ただ一人、影の喜兵衛という、隻眼で、跛の伊賀の忍び上りを使つてゐるだけで、足輕も中間も女中も置いていなかった。

「喜兵衛——」

居室で呼ぶと、廊下で、すぐ返辞があった。

「江戸の台地は、いくつある？」

「高輪台、白銀台、目白台、三河台、神田台、本郷台——まず、そのあたりでござる」

「もし、智能秀れた武将が江戸城を攻めるとすれば、どの台地を占拠すると思うか？」

「本郷台かと存じます」

「なぜだな？」

「本郷台よりお城まで、さえぎるべき天然の要害はござらぬ」

当時、江戸川は、小石川の水と合して、飯田町附近をすぎて、一ツ橋、神田橋の城濠に入って、下流は、日本橋川になっていたのである。

湯島吉祥寺前に、巨濠をうがって、これを神田川に疏せしめ、柳原筋に堤防を築く、という計画があったが、まだ手がつけられていなかった。

「よし。では、神田台を、すまいときめるぞ」

彦左衛門は、云った。

敵に本郷台を占領された場合、その台地の一部である神田台に、旗本が住んで、これを防ぐ任務に就くのは、戦略上の当然のことであった。

「早速に——」

喜兵衛は、一礼して出て行こうとした。

「待て、喜兵衛」

呼びとめて、彦左衛門は、

「薬を塗ってくれ」

と、双肌をぬいだ。

彦左衛門の全身には、無数の刀槍傷があった。

五十の坂をこえてから、季節のかわりには、痛むようになった。喜兵衛のつくる忍者薬は、よく利いたのである。

彦左衛門は、喜兵衛に、塗らせ乍ら、ふと、めずらしく、感慨をもらした。

「十六歳で、わが君に召出されて、およそ三十年、戦さの場をかけめぐって、つくった刀傷槍傷だ。妻子を持たず、忠義一途にはげんでの。……その働きで、賜ったほうびが、武蔵埼玉郡の二千石。喜兵衛、どう思うぞ、この知行高を？」

「……………」

喜兵衛は、黙々として、塗りつづける。

「あまりに黴すすいと思わぬか？」

「不平でござるか？」

「不平だ。三河譜代の旗本で、一万石を賜った者は一人も居らぬ。父を、兄弟を、子を討死させ、一族をあげて、奉公した者が、わずか千石か二千石の知行にあまじなければならぬ。……それにひきかえ、昨日は東方へつき、今日は西方へ寝返って、狡猾こうかつにたちまわった奴らが、十万石二十万石の国守になり居るのが、我慢ならぬわ。いいや、譜代のうちでも、口さきのうまい奴らは、いつの間にか、大名になり上り居って、行列をかざりたてることを、淫乱娘いんらんのように、よろこんで居る。そやつらの面を見るたびに、胸が、むかむかいたすのだ」

「……………」

喜兵衛は、なお、おのが意見を吐こうとはせぬ。

「喜兵衛、お前の考えを述べてみい」

「殿——」

「なんだ？」

「三十年のあいだに、殿は、無数のご朋輩ほうはいの討死をござんなされた」